



松 正高 (はたまさか)
1954年京都市生まれ。大学卒業後、株式会社松栄堂に入社。98年、同社代表取締役社長に就任。香文化普及発展のため国内外での講演、文化活動にも意欲的に取り組む。2004年ポストン日本協会よりセーヤー賞を受賞。環境省おくり環機部会委員、12年7月から15年7月まで京都府教育委員会委員、同志社女子大学非常勤講師などの公職も務める。著書に「香清話」(淡交社)、「香三才」(東京書籍)、監修図書として「香千載」(北村推古書院)などがある。

長い年月をかけて継承されてきた京都の伝統。次代を考えるために、今一度、京都と世界各国を比べ、文化を見つめ直す特集をシリーズで展開しています。「世界と比べる京都の文化」の最終回は「香」。

日本人は大陸からもたらされた香料に出会って以来、さまざまな香りを産み出し、独自の香文化を発展させてきました。

京都で育まれてきた香文化の本質や歴史について、松栄堂主人の畑正高さんに聞きます。

◆仏教とともに伝来した香り

日本ではいつの時代に香りが意識されるようになったのでしょうか。

日本には四季があり、自然の香りに恵まれています。しかし、古代の日本には、香りの素材を採集し、調査する方法はありませんでした。そんな中、飛鳥時代に仏教の伝来とともに中国から本格的な香料と使い方が日本にもたらされたとき、日本で最も古い香りについての記述は、595年に淡路島に沈水香木が流れ着いたと記す日本書紀です。日本人は、外国から伝えら

たさまざまな文明の中で、少しずつ香りの知識や技術を取り入れてきました。現在でも、お寺を訪れるとお香の匂いが堂内を満たしています。おそらく1400年以上前の日本人も、そのような場面で仏の世界に導かれていたのだでしょう。香りだけでなく、今まで見たことのないような天然素材を建築など、さまざまな文明と出会い、日本の生活文化は豊かになり始めました。この時期が日本の香りの歴史におけるあけぼのといえるでしょう。

奈良時代には、香文化を発展させ、新しい香りの創作も始まります。平安時代には、香木や香料を調合し、香りのアレンジを行い、上流貴族の生活で使われるようになり、わが国独自の香りを築きむようになりまし

た。古今和歌集から1000年ほど後には、枕草子や源氏物語などの王朝文学が生まれ、文学作品の中にも香りに関する記述が多く見られます。香りを通して生活の中のアラカさや懐かしさ、滑らかなさを季節に応じて享受していく工夫が進んだのだと思います。その頃には春夏秋冬を彩る日本の香りが整いました。

に人が集まってきました。そんな中、香文化も変化してきます。この時代に日本で文化的に大きな影響を与えたのは、禪や浄土などの新仏教です。それらを積極的に受容したのは、全国から京都に集まってきた武士です。貴族社会がパワーを失っていく一方、新しく勢いのある人々が



乾燥前の柔らかい線香を隙間のないように敷き詰める生付け

◆日本独自の香りの創造

当時の香りとはどのようなものだったのでしょうか。

今日の私たちは、常に一定の香りを再現できると思いがちです。伝統的な日本の香りは人や材料によって違いがありながらも、念頭に置く季節感は同じものを共有していました。例えば、春には漢詩の一節にある梅の花をイメージしたのです。平安王朝貴族の香りの基礎は、中国文化を前提にした教養文化だったのです。

大陸の影響を受けながらも日本独自の香文化が育まれていったのです。大陸では、907年に唐が滅び、その後宋・元・明と続きます。その文化的な潮流が日本にも影響します。京都では、貴族文化に対して武家文化が台頭してきた時期です。武士のユートピアが作られた鎌倉時代から室町時代になり、再び京都

に人が集まってきました。そんな中、香文化も変化してきます。この時代に日本で文化的に大きな影響を与えたのは、禪や浄土などの新仏教です。それらを積極的に受容したのは、全国から京都に集まってきた武士です。貴族社会がパワーを失っていく一方、新しく勢いのある人々が

に人が集まってきました。そんな中、香文化も変化してきます。この時代に日本で文化的に大きな影響を与えたのは、禪や浄土などの新仏教です。それらを積極的に受容したのは、全国から京都に集まってきた武士です。貴族社会がパワーを失っていく一方、新しく勢いのある人々が



さまざまな国の自然が育んできた香りの素材の数々

室町時代は今日の京都文化に多大な影響を残しています。

お香やお茶の文化が広まりつつある中、京都を混沌とさせる応仁の乱が起こります。そんな中、東山文化で新たな流れが生じます。それまでは、別室でお茶を準備して来客に配っていたのが、客人の前でお湯

香りを楽しむ世界の知恵

オマーンの乳香

お香の原料として親しまれる乳香は、カンラン科バスニア属の木から採れる樹脂です。古代エジプトの王たちが、神殿で神にさげた香りであり、乳香をたくことが神に近づくコミュニケーション手段でもありました。その聖なる香りは世界の限られた地域でしか産出されず、それは3000年以上前から現在も変わリません。アラビア半島東端の国、オマーンもそのひとつです。



サララでは今も乳香をシートにたきしめる習慣がある

オマーン南部ドファール地方の中心都市サララ郊外に、乳香の木の本生地があります。そこでの収穫は、限られた人たちにだけ許されています。サララの町の人たちの暮らしは、今なお乳香にあり、例えば夕刻には乳香をたき、家中に香りをくゆらせる習慣があります。また、その煙を寝具や服にたきしめたりも、それはまさに、平安時代からある日本の枕籠の習慣と同様なのが驚きです。

各家庭で使用する乳香の量は、1カ月で約5キロから7キロといわれており、町には香料専門の市場もありま



邸内聞香図より(17世紀)松栄堂 松寿文庫所蔵
邸内でくつろいだ様子で香を聞いたり、髪に香りをたきしめたりする様子が描かれた

元、明という国々の新たな文化に出合い、自分たちの価値観を具現化する時代が到来しました。禅宗では香木をたきます。香料を調合する知識を持っていなかったこともあり、季節の香りを作るのではなく、手に入れた香木そのものをたいていました。香りの勢いは強調できず、天然の素材のため使い切るとなくなってしまう。そのため、小さく切った

を沸かして茶をたてるようになりまし

た。江戸時代初期には、大陸では明から清に変わります。その時に、臨済宗と曹洞宗に続く三つ目の禅宗である黄檗宗が日本に伝えられます。黄檗宗とともにもたらされたのが、煎茶と、お香を細く伸ばして線香にする線香の技術でした。お香を細く伸ばすことで、世の中は非常に便利になりました。火の種がいつもあり、暗闇でも時間を刻むことができます。江戸時代を通じて線香は広がりました。

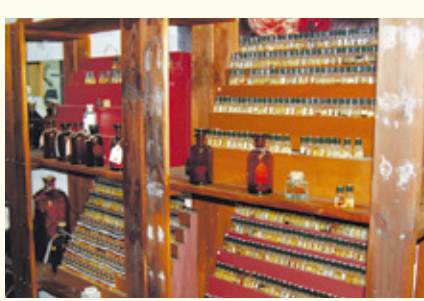
平安時代に産み出された配合の魅力、禅宗との出会いによる香木そのものを鑑賞する楽しみ、江戸時代に広まった線香の便利さ。大きく分けると、その三つが日本の香文化の流れを作ってきたでしょう。

ドイツのオー・デ・コロン

ドイツ第4の都市ケルン。18世紀、ケルンの町には、香りを求めて各国のセリブたちが集まりました。その香りであるオー・デ・コロンは、私たちになじみのある香料です。その意味はケルンの水というフランス語で、あまりに人気を博したため一般名称にまでなりました。

当時、イタリアからの移住者であるフェミニスやフアリナが、オリジナルの香水を調香し売り出しました。すると、ナポリオンにも気に入られ、フランス軍の兵士たちにケルンの水と命名されたといわれています。ベルガモットという柑橘を中心に、ローズマリーなどのハーブをブレンドした爽やかな香りです。文豪ゲーテもこの香りを好み、詩作の際、傍らに置いていたといわれます。当時、ドイツの人々にとってもイタリアは憧れの地であったように、ケルンの水の香りは、イタリアで万能薬として用いられていたアクア・ミラビリスをもにしましたものだったようです。

この香りは、現在もケルンの町で作られており、大聖堂の近くにフアリナハウスという工房もあり、博物館にもなっています。旧市庁舎の壁には多くの偉人とともにフアリナの像も飾られ、彼がいかにケルンの町に貢献したかがうかがえます。



オー・デ・コロン工房が再現されたフアリナハウス

ニユーサウスウェルズ州は、広大な大陸の中で昔からティートゥリーが自生するエリアです。その効能は動物も知っているようで、煙には牛やエミュー、ワラビーなどがやって来ては、葉に体をこすり付け、虫を取るそうです。また、周囲にこの木が自生する泉はマジカルグリーンと呼ばれ、癒やしのスポットになっています。古くは長旅から戻った時や出産の時、この泉で体を洗ったそうです。人間は香りの中に楽しみだけでなく、抗菌作用や沈静作用などを得るためにも活用してきました。



ティートゥリーの聖地といわれるバンガワルバン谷



玄関や広い空間などに向いている渦巻型のお香

例えば、京都の料亭では、玄関先でお香をたかれています。慣れているお店は上手に香りを使っています。香りの経験が浅いと結果を求めてしまい、濃く使ってしまうがちです。誰にも気付かれないくらいに薄く弱く、日常的に使うことによって空間が意図する香りに染まっていきます。するとそこにいった瞬間、香りが結界のように感じられるのです。日常の世界とは異なる空間へのきっかけをお香が作っているのです。

◆世界での香りを受容する感覚の違い

世界での香りにおける感覚的な特徴は何でしょうか。

火の発見という言葉があります。原始人が火をわが物としてコントロールできるようにになったことを指すのでしょ

う。火が人間の生活で必要となっていく中で、煙も重要な役割を担いました。保存食を作るために薫製に用いただけでなく、コミュニケーションの手段にもなりました。火を使って香りを発生させると、人が集まること



日常使いしやすいスティックタイプのお香